

ニューヨークで読む、宮沢賢治の「春と修羅」

～文学に見る、信仰と宗教哲学～ 海津 恵 (NY在住)

筆者は2月の雪の日にブルックリン区内のプロスペクトパークに俳句を書く為に出掛けたことがあった。芭蕉の禅の心を理解したかったからだ。公園で、土に根をしっかりと張った背の高い立派な木々に積もる雪に、心洗われる気持ちになった。清少納言の「降るものは／雪は」を思い出しながら、雪のふり方や、音、匂いや風、踏みしめる雪の感覚に一心の注意を払い、無我無心を感じた。その後、知人の主催するZoomのネット・メディテーションに参加した際、この経験話を話した。参加者も興味深く聞いてくれていた様に感じた。

コロナ禍で人々の心は疲弊し、統計から失業率と犯罪率が上がっていることが分かる。武漢発祥のコロナウイルスに怒りやフラストレーションを感じた人が、アジア系ニューヨーカーを狙ったと見られる犯罪も増え続けている。コロナ禍の不安定な現状は複雑で、精神疾患を煩った人や犯罪歴のある人、ホームレスが加害者になっていることも分かって来ている。そんな中、警察の見回りを強化したり、精神衛生の支援制度を改めよう、との声も上がっている。以前から、犯罪歴のある個人の社会復帰は難しい課題であったが、コロナ禍のショックで、ホームレス・シェルターの問題も含め、社会問題が複雑化している。どこで、どの様に被害に遭うのか、分からないのが現状だ。以前の当たり前の日常が灰色にくすんで見えるのは非常に残念だ。同時に、民主主義のあり方を再考する機会でもある。

若い同僚の突然の死と向き合う為に、俳句を学び始めた筆者は、芭蕉や禅について学ぶうちに、仏教的哲学やその世界観や死生観に興味を持った。それをきっかけに、高校の教科書で読んだ宮沢賢治の『永訣の朝』を再読した。宮沢が詩の中で雪に込めた願いと、「兜率（とそつ）の天の食」とはどのようなものか興味深く思い、雪の日に出た。だが、雪はあいにく雨に変わり、結局筆者には、「天の食」は無縁かと思えた。

素晴らしい文学作品は、読む折々に、様々な受け取り方が可能で、それが魅力でもある。「心象スケッチ」と賢治本人が呼んだ詩集『春と修羅』には、妹トシが亡くなった翌年に樺太を旅し、訪れた場所を描いた詩「オホーツク挽歌」や「樺太鉄道」等が収められている。賢治はサガレン（サハリン、樺太）で、チェーホフと同じルートを旅したそうで、そこを通る鉄道は、「銀河鉄道の夜」のモデルになったと言われている。モスクワ大学でロシア語を学んだ筆者には、留学中に雪景色を窓越しに教室で、ロシア人教授とチェーホフの作品を読んだことが懐かしく思い出される。

この10年間、北米やロシアの生徒に日本語を教えてきたが、その際に、宮沢賢治の児童文学も勧めてきた。エスペラント語話者だった賢治は、自身の詩をエスペラント語にも訳していて、英語圏でも宮沢作品の多くが翻訳され、出版されている。

「永訣の朝」は、良き理解者だった妹トシが亡くなる際の心模様を詠んだ詩だ。筆者には、法華經信仰を分かち合った妹トシが亡くなった事で、賢治には心拠り所がなくなり、心にぽっかりと穴が空いたに違いないと思えた。そして、「わたしのいもうと」を「信」という観点から再読してみた。生きていくのに必要な、人としての信念や希望としての信だ。それは、万人が共感出来る、不安や悲しみだ。信仰を共にした人を亡くし、信をなくした心は、どのように信を取り戻し、立ち上がるのか考えてみたかった。

紀野一義氏¹⁾は仏教学者の視点で、著書『法華經の風光 第 卷 光ながるる』において、宮沢文学を解説している。人は悟っていても迷い、壮大な思想を理解しても、それはどこかで崩れてしまう。人である限り、信仰や悟り、信念や理想とはそうゆうものであり、人には人間である¹⁾ 故の矛盾がある。それを理解することから、自己と他者を受け入れ、許す、寛容な心が生まれるのではないだろうか。この本を参考にしながら、筆者は賢治が向き合った「人間の精神の二重構造」について考え、新たな目で詩を鑑賞してみた。宮沢が生きた時代は、戦争や震災、大恐慌で、社会のあり方が急変していた。混乱の時勢に、揺らぐ信と変化する価値観の元、人はどう生きるべきか、宮沢作品が問いかけているようにも筆者には感じられるのだ。

『永訣の朝』で賢治は妹の為に、雪をとりに外に出た時の空模様を、「あんなおそろしいみだれたそらから このうつくしい雪がきたのだ」と詩に詠んでいる。これは恐ろしい現実を目の前にしても、清らかな

希望がある、という意味にも受け取れる。賢治は次のように語りかけながら、『永訣の朝』を終えている。

おまへがたべるこのふたわんのゆきに

わたくしはいまここからいのる

どうかこれが^{とそつ}兜率の天の食に変わって

やがておまへとみんなとに

聖い⁰資糧^てをもたらすことを

わたくしのすべてのさいわひを

かけてねがふ

4月に入り季節は移り変わり、プロスペクトパークはマグノリアや桜、イロハモミジの花が満開で、市民は公園に友人、家族と集い、爽やかな春の陽気を楽しんでいる。コロナウイルスのワクチンは、16才以上のニューヨーク市民が無料で摂取出来るようになったが、ウイルスの変異種や、ワクチンを取り巻くニュースは日毎に周毎に変わり、今後の状況もまだまだ分からない事が多い。雪景色にではなく、春の移ろいや、蘇る様な木々花々の姿、コロナ禍の時勢に自身の心の有り様を見つめ直す時、賢治の詠った「聖い資糧」が、筆者自身の心に希望として見えて来る気がするのだ。



水彩：海津恵 「春の息」

-
- i 海外ではツイッターの元祖とも言われる。
 - ii (1922 - 2013年) 宗教家。仏教学者としては中村元らと共に仏経典を翻訳。